

厚生労働科学研究費補助金（認知症政策研究事業）

分担研究報告書

働く場の認知症観の変化の研究

研究分担者 岡村毅

東京都健康長寿医療センター

自立促進と精神保健研究チーム 研究部長

研究要旨

【目的】

本研究の目的は、認知症観がどのように形成・変容するかを、現場の相互作用に着目して明らかにすることである。

【方法】

対象は東京都板橋区高島平団地における、無選別で就労機会を提供する C 社とした。参与観察およびインタビューにより、認知症と診断された人の就労開始時における受け入れ側の認識とその変化を検討した。

【結果】

初期には「物忘れが激しい」「徘徊する」といったステレオタイプに基づく認識がみられたが、継続的な関わりを通じて「他の人と変わらない」「個性の一つ」といった理解へと変化した。C 社の「シフトなし・ノルマなし・無選別」という構造は、多様な特性をもつ人々の共存を可能にし、認知機能低下を特別視しない環境を形成していた。

【考察】

認知症観は知識として固定されたものではなく、共に活動する経験を通じて関係の中で再構成される動的なものであることが示唆された。認知症観の変容には、啓発よりも相互作用の場の創出が重要である。

A. 研究目的

「認知症観」は、近年の認知症施策の文脈の中で前景化してきた概念である。しかし、その定義は必ずしも明確に規定されておらず、むしろ政策的スローガンとして先行し、学術的整理は途上にある。

従来の認知症理解は、認知機能の低下やBPSD（行動・心理症状）といった欠損モデルに依拠してきた。しかし近年では、認知症を「能力の喪失」としてのみ捉えるのではなく、「どのような生活が可能であるか」という視点から再考する動きが強まっている。すなわち認知症観とは、単なる疾患理解ではなく、「その人がどのように生きる存在として見なされるか」という規範的枠組みそのものである。

さらに重要なのは、認知症観が固定的なものではなく、日々の実践の中で形成され、更新され続ける動的な構築物であるという点である（社会構成主義）。認知症観は、医療者、本人、家族、地域住民の相互作用の中で絶えず再定義される。

したがって、認知症観を論じる際には、抽象的な理念や定義の整備に先立ち、現場で実際に何が起きているのかを丁寧に記述することが不可欠となる。制度や言説としての認知症観を外在的に論じるのではなく、具体的な生活場面において人々がどのように認知症を理解し、関わり、意味づけているのかを丹念に描き出す必要がある

（Clifford Geertzの「厚い記述（thick description）」に対応する）。

本研究の目的は認知症という状態にある人を、社会がどのような存在として位置づけ、その人の生をどのように構想するかについて、現場における相互作用の詳細な観

察によって探索することである。

B. 研究方法

東京都板橋区の高島平団地の中央部において「シフトなし、ノルマなし、年齢制限なし、経験不問」の働く場を提供するベンチャービジネス（C社）がある。この会社のビジネスモデルは、会社が封入等の軽作業を大規模に受注し、働き手は場において自分のペースで働き、出来高払いで報酬を得る仕組みである。C社で働くのに先立ち面接などはないが、事前の会員登録（氏名・生年月日・性別・住所・電話番号・メールアドレス）を要する。会員は次回の勤務希望日を1回分だけ登録することが可能であり、それにより同一会員に軽作業が集中することのないよう管理されている。フィールドに設置した拠点での住民や、フィールドのキーパーソンからも、この会社が高齢者の健康や自己実現に資する活動をしているという情報が得られている。本研究に先立って何度か訪問し参与観察したところ、業務開始の1時間前には参加者がお菓子を持ち寄って談笑しており、仕事でも会話が絶えず、うまくいかない人をみんなで支え、終業後も談笑したり、スタッフを捕まえて昔話をしたり、さらにはスタッフと夕食に行くといった様子が観察された。

ここで認知症と診断された人が働き始めたときに、受け入れ側がどのようにそれを知覚するかについて参与観察及びインタビューにより明らかにした。

（倫理面への配慮）

本研究は東京都健康長寿医療センターの倫理委員会の承認を受けた。

C. 研究結果

C 社では、会員登録時に本人の状態評価を行わないため、認知機能低下があることがあらかじめ分かっている人を職場で見守りながら関わることは、本研究開発以前には初めての経験であった。そのため、研究協力当初には、初めて関わる認知機能低下のある人に対して身構えてしまっていたことが語られた（「やる前だと……、物忘れ激しくて深夜徘徊……みたいな印象」）。

しかし、3 か月後には認知機能低下のある人への印象の変化が語られ（「意外と認知症とはいったけれど、そんなに周りの人と変わらないものになって」「実際に他に来てくださった方々の中でもちょっと物忘れ激しいとか、慌ただしいなっていう方とかと大して、そこまで変わらないんじゃないかなっていう」）、実際に関わる経験を通して、認知機能低下のある人、ひいては認知症そのものに対する認識が変化していったことが推察された。

さらに、認知機能低下のある人との関わりを継続する中で、認知機能低下によって生じる得手不得手が、特別な問題としてではなく、個性の一つとして受け止められやすくなっている傾向が窺えた（「(参加者は)別に普通の方々に、全然いるような感じなので、ぱっと見、分からない」「私ぐらいの距離感ですとそんなに、普通にそれぞれ個性」「いろんな方いるので、この方はちょっとペース感、ゆったりなんだな、みたいな」）。こうした受け止め方の背景には、C 社がこれまで、明示的に支援対象を位置づけることなく、多様な状態や特性をもつ人々を結果的に受け入れてきた職場であったことの影響があると考えられる。

D. 考察

本研究は、認知症観があらかじめ固定された信念体系として存在するのではなく、実践の中で形成され、変容する過程を具体的に示した。とりわけ、C 社における就労という日常的な社会参加の場において、認知機能低下のある人との継続的な相互作用を通じて、当初はステレオタイプに基づいていた認識が、より個別的かつ関係的な理解へと変化していく過程が観察された。

研究協力当初にみられた「物忘れが激しい」「徘徊する」といったイメージは、社会に流通する典型的な認知症像を反映したものであり、これはメディアや医療言説によって形成される「カテゴリーとしての認知症」に対応する。一方で、実際に同じ場で働き、時間を共有する中で、「他の人と大して変わらない」「個性の一つ」といった語りへと変化していったことは、認知症が抽象的なカテゴリーから具体的な他者へと再定位されたことを意味する。認知症観は知識として内在しているのではなく、関係の中で実践的に生成される。

本研究のフィールドである C 社の特性は、この認知症観の変容を促進する重要な条件として位置づけられる。C 社は、事前の能力評価や選別を行わず、「シフトなし・ノルマなし」という緩やかな参加条件を設定している。この構造は、特定の能力基準に基づいて人を分類することを回避し、結果として多様な特性をもつ人々が同一の枠組みの中で共存する状況を生み出している。そのため、認知機能低下は特別なカテゴリーとして顕在化しにくく、「多数の違いの一つ」として埋め込まれる。このような環境は、認

知症を「例外的存在」としてではなく「連続体の中の一様相」として捉える認知症観を生成しやすい。

この点は、従来の医療・福祉サービスにおいて、対象者を明示的にカテゴリー化し、支援の対象として位置づける枠組みとは対照的である。従来の枠組みでは、「認知症であること」が支援の前提となるが、そのこと自体が認知症を特異化し、他者性を強化する可能性がある。一方でC社のような場では、「認知症であること」を前提としない関係が先行し、その後に必要なに応じて調整が行われる。この順序の違いが、認知症観のあり方に大きな影響を与えている可能性が示唆される。

以上を踏まえると、認知症観の変容は、教育や啓発といった情報提供のみではなく、具体的な相互作用の機会、すなわち「ともに活動する場」の存在に強く依存していると考えられる。本研究の知見は、認知症観を変えるための介入として、知識の伝達ではなく、関係性の再編成を重視する必要性を示している。認知症観とは説得によって変わるものではなくともに何かをすることで代わる可能性がある。

E. 結論と今後の課題

本研究は、認知症観が固定的な知識ではなく、共に働く経験を通じて関係の中で再構成される動的なものであることを示した。

今後は、このような場の再現可能性と持続性、異なる地域・文脈での適用可能性を検討するとともに、認知症観の変容が本人の生活や社会参加に及ぼす影響を明らかにする必要がある。

F. 研究発表

1. 論文発表

1. Okamura T, Iizuka A, Mitsui M, Sakurai H, Nishi M, Ura C. Welfare to Meaningful Work. *Int J Geriatr Psychiatry*. 2025 Jan;40(1):e70043. doi: 10.1002/gps.70043. PMID: 39810229.
2. 岡村毅、飯塚あい、三井美穂子、櫻井花、宇良千秋 高齢期に働く動機分析：高齢期に働く多様な場があることがのぞましい．老年精神医学雑誌 2025; 36 : 81-87
3. Sakurai H, Nishi M, Mitsui M, Iizuka A, Ura C, Okamura T. Effects of engaging in remunerated productive activities on people with cognitive impairment: a pilot study. *BMC Res Notes*. 2025;18(1):501. Published 2025 Dec 4. doi:10.1186/s13104-025-07572-x

2. 学会発表

岡村毅、飯塚あい、三井美穂子、櫻井花、西真理子、宇良千秋. 仕事を通じた認知症共生社会作りの探索的研究. 第26回認知症ケア学会(福岡) 2025.5.31~6.1 国内 ポスター

G. 知的財産権の出願・登録状況 (予定を含む.)

1. 特許取得

該当なし

2. 実用新案登録

該当なし

3. その他

該当なし